統計数理　第36巻　第1号（1988）

日蓮遺文の文体

――計量分析を通して――

群馬大学教育学部　古　瀬　順　一

（1986年7月　受付）

1. はじめに

次のアナリーゼ項目によって，「日蓮遺文」の文体的特徴を数量的に解析した[注1)]．

(1)　文の構造　　(3)　品詞の現われ方
(2)　主辞の現われ方　　(4)　漢語の使用率

その結果は，次の通りである．

(1) では，単文の占める割合が高かった．
(2) では，主語を比較的大事にしていることが明らかになった．
(3) では，名詞の比率が高かった．
(4) では，漢語の比率が高かった．

このことから，文章心理学的にいえば，日蓮は「アポロ型」[注2)] 人間であり，そして，「内向型」であり，「体言型」であって，なおかつ「漢文脈作家」であることが明らかになった．以下に，そのことを検証する．

2. 文の構造について

ここでは，構成上の文の種類をアナリーゼ項目とした．すなわち，単文，複文，重文の三種に分けて処理した．

表1．文の種類の割合（%）

作品＼文構造	単文	重文	複文
転重軽受法門	56	8	36
御衣並単衣御書	50	13	37
太田殿女房御返事	42	43	15
法衣書	43	14	43
こう入道殿御返事	42	42	16
土木殿御返事	50	50	0
檀越某御返事	64	18	18
四条金吾殿御返事	77	15	8
平均	53	25	22

表2. 日蓮と親鸞の文長標本データ

対象＼サンプル	n（文の数）	$\bar{x}$（平 均）	S^2（標本分散）
日蓮消息	108	8.5	33.2
親鸞書簡	94	10.8	60.9

主述関係がベーシックとは必ずしもいえない日本語の場合，統辞上，この構成の形式による分類の有効性を疑問視する立場もある．しかしながら，波多野完治によれば，この分類法は，そのまま，文章の心理学的分析に適用できるということである．従って，ここでも，この分類法を採ることとした．表1が，それによってみた文の種類の割合である．

片岡 了は，『開目抄』における文の種類の割合を出しているが，それによれば，単文51%，重文16%，複文33% ということである[注3]．こうした情報から，次のようなことが指摘できる．

消息を中心とした日蓮遺文の文構造は，単文仕立てのものが，圧倒的に多い．『太田殿女房御返事』，『法衣書』，『こう入道殿御返事』の三編を除けば，全文数の5割以上が単文から成っている．『四条金吾殿御返事』にいたっては，何と，8割に近い文が単文ということになる．この単文型の圧倒的多さは，文構造そのものの単純さを意味している．そして，これが，日蓮遺文の短文化傾向の一因ともなっている．事実，他の宗教家との文長比較においても，日蓮の短文化は証明される．例えば，親鸞の書簡と比較してみよう．単純無作為抽出法により，それぞれ，約100文を抽出し，文節数により平均文長を求めると，表2のようになる[注4]．

表2で，平均文長 $\bar{x}$ を比較すると，数値的に親鸞書簡のほうが大きい．しかしながら，これは無作為抽出によるデータであるので，当然のことながら，誤差を認めなければならない．たとえ $\bar{x}_1<\bar{x}_2$ であっても，日蓮のほうが短文であるとは限らない．そこで，この両者の平均文長が等しいか否かを調べるための検定をおこなう．まず，F 検定によって，分散が等しいか否かをみる．表2の標本によれば，標本分散 S^2 は，日蓮消息で33.2，親鸞書簡で60.9となっており，後者のばらつきが大きい．すなわち，日蓮の文長のほうが安定していることになる．しかしながら，これも平均の場合と同じく標本によるものなので，母集団分散が等しいか否かの検定が必要になる．ここでは，文長は正規分布に従うと仮定して，有意水準 $\alpha=0.05$ で F 検定をおこなう．

$$F=\frac{60.9}{33.2}=1.83$$

$$df_1=n_1-1=94-1=93$$

$$df_2=n_2-1=108-1=107$$

F 分布表における2.5% 点の値はおよそ1.48であるので，日蓮と親鸞の文長の分散は等しくなく，等分散仮説は成立しなかったことになる．そこで，次に，コクラン・コックス法を用いて，平均値が等しいか否かの検定を有意水準 $\alpha=0.05$ でおこなう．

$$t=\frac{\bar{x}_1-\bar{x}_2}{\sqrt{\dfrac{S_1^2}{N_1}+\dfrac{S_2^2}{N_2}}}=\frac{10.8-8.5}{\sqrt{\dfrac{33.2}{108}+\dfrac{60.9}{94}}}=2.41$$

この場合の t の棄却域は，

$$\frac{(S_1^2/N_1)t_1+(S_2^2/N_2)t_2}{(S_1^2/N_1)+(S_2^2/N_2)}=\frac{0.307\times1.980+0.648\times1.986}{0.307+0.648}=1.984$$

である．ただし，t_1，t_2 はそれぞれ $df_1=93$，$df_2=107$ の t 分布の 2.5% 点のおおよその値である．従って，有意水準 $\alpha=0.05$ の検定では，有意であると出たわけである[注5]．このことは，つまり，日蓮と親鸞の文長比較は，有意水準 $\alpha=0.05$ で日蓮のほうが短いということである．

こうしてみると，文構造と文長との間には相関関係があるように思われる．短文が構造的に簡単であることは，容易に頷けるところである．構造的に簡単な文を重ねていくということは，思い切って論理展開していることを意味する．文章心理学的にみれば，日蓮は，ためらいを知らない，相当に判断力のある人物であったように思われる[注6]．

3. 主辞の現われ方について

主語が顕在化されない文は，場面や文脈への依存度が高いとされる．日本語に，その特徴は殊に顕著である．逆に，主語が顕在化された文は，丁寧な論理展開を心がけて書かれている．組織立てた表現を好むタイプの文である．このような視点に立つと，主辞のあり方は，書き手の個性をみる手がかりになる．すなわち，文体情報になりうるのである．

先の，片岡 了によれば，主語が顕在化されない，すなわち文脈依存型の文の割合は，親鸞の場合，『三経往生文類』で 33%，『唯信抄文意』で 32% ということである．日蓮遺文の場合は，表 3 のようになる．

表 3 における四つの作品の，文脈，あるいは場面依存型文の平均割合は，19.2% である．これを，親鸞の二つの作品平均割合 32.5% と比較すると，日蓮の文の，文脈や場面への依存度の低さは歴然としている．ここに，日蓮の執筆態度をみてとることができる．日蓮は，丁寧に噛砕くような表現を意図したのである．受け手の事を思い，わかり易く表現することを心がけたものと思われる．言語の伝達性を大事にした人であったのである[注7]．

日蓮の文が，係り受けの関係において整然としているのは，主述の対応が明確であるからなのかもしれない．

表 3. 主語が現われない文の割合

作　　品	文脈依存型文（%）
転重軽受法門	22.2
御衣並単衣御書	18.8
法　衣　書	14.3
大田殿女房御返事	21.3
平　　均	19.2

4. 品詞の現われ方について

品詞の現われ方をみれば，表現主体の叙述特徴がつかめる．いかなる場で，どのような語を使用しているかをみることによって，その文章における叙述用式がうかがえるのである．

我が国における文章心理学のパイオニア・波多野完治は，谷崎潤一郎と志賀直哉の文章を比

表4.　日蓮遺文の品詞比率

作品 / 語数・比率 / 品詞	大田殿女房御返事		転重軽受法門		御衣並単衣御書		法　衣　書		開　目　抄	
	語数	比率(%)	語数	比率(%)	語数	比率(%)	語数	比率(%)	語数	比率(%)
名　詞	444	59.9	141(30)	51.6	86	62.8	121(6)	57.4	389	65.2
代名詞	34	4.6	7(1)	2.6	1	0.7	4	1.9	22	3.7
動　詞	189	25.5	90(13)	32.9	41	29.9	71(2)	33.7	132	22.1
形容詞	18	2.4	13(4)	4.8	0	0	2	0.9	10	1.7
形容動詞	5	0.7	0	0	0	0	1	0.5	3	0.5
副　詞	31	4.2	18(3)	6.6	3	2.2	6(1)	2.8	23	3.9
連体詞	0	0	0	0	4	2.9	3	1.4	1	0.2
接続詞	20	2.7	4(1)	1.5	2	1.5	3	1.4	16	2.7
感動詞	0	—	0	0	0	0	0	0	0	0
抽出自立語数	741	—	273(52)	—	140	—	211(9)	—	596	—

※ 語数各セル内の括弧内数値は，漢文引用文を読み下し文にした場合の自立語数を示す．
『開目抄』の数値のみ，片岡 了のデータによる．

較し，前者を「用言型」，後者を「体言型」として類別している．前者では動詞などの使用度が高く，後者には名詞が多く出現しているという．そして，「用言型」の文章は「社会への方向」を，「体言型」のそれは「事物への方向」を示すものだという．すなわち，体言と用言の使われ方が，外的（社会的）か，内的（心的）かの判断情報になるというのである．

それでは，日蓮遺文の品詞の現われ方をみてみよう．御書五編における各品詞の出現度数をまとめると表4のようになる．

表4においては，名詞比率の高さが目につく．これは，日蓮遺文の特徴といえる．何故ならば，親鸞との比較においても高率を示しているからである．日蓮の五つの作品における名詞比率平均は59.38%である．片岡 了のデータによれば，親鸞の『唯信抄文意』における名詞比率は48.9%ということである．

5.　漢語の使用率について

日蓮消息より，女性宛のものと，男性宛のものとの漢語の使用量を調べてみると，表5のようになる．

表5によってわかるように，女性宛消息の1文中の漢語割合は310÷273＝1.14%ということになり，男性宛のそれの199÷118＝1.69%よりも，わずかに低率である．ここでは，男性宛のものと女性宛のものとは僅差となっているが，これは，『大田殿女房御返事』の傑出した高率によるためである．この作品を外すと，女性宛消息九編の1文当り漢語比率平均は156÷205＝0.76%となり，男性宛のそれとの差は，かなり開くことになる．

大田殿女房を除く他の女性達には，総じて，漢語（漢字）の使用をおさえ，平がな書きを心がけていた．それら女性宛消息は，比喩表現なども多く，調子もまた滑らかである．やわらかく，平易な文章表現を心がけていたのであろう．それに対して，男性宛のものは，漢字が多く，口調もまた断定的で堅い表現が多い．漢文体の文章が，男性宛のものに多いのも，頷けるところである．

ここでも，また，受容主体に対する配慮をみてとることができるのである．日蓮が，受け手

表5. 日蓮消息における漢語使用量

	作品	文数	漢語数	1文当り漢語数
女性宛	弁殿尼御前御書	14	19	1.36
	さじき女房御返事	18	12	0.67
	妙一尼御前御返事	49	46	0.94
	国府尼御前御書	32	35	1.09
	妙心尼御前御返事	7	5	0.71
	富木尼御前御書	26	10	0.38
	窪尼御前御返事	20	13	0.65
	持妙尼御前御返事	17	7	0.41
	上野殿母尼御前御返事	22	9	0.41
	大田殿女房御返事	68	154	2.26
	計（平均）	273	310	(1.14)
男性宛	四条金吾殿御消息	25	34	1.36
	佐渡御勘気鈔	14	22	1.57
	富木殿御返事	19	14	0.74
	曽谷入道殿御返事	17	33	1.94
	忘持経事	43	96	2.23
	計（平均）	118	199	(1.69)

を意識して漢字を使用したであろうことは，同一人宛の複数の作品に，ほぼ同じ傾向が認められることからも伺える．たとえば，図1における同一人宛消息の漢字使用率をみると，ほぼ安定した使われ方がなされていることがわかる．

図2は，片岡 了のデータをもとにして，それに『大田殿女房御返事』の情報を加え，図式化したものである．これによると，日蓮遺文の漢語比率は，その平均において，親鸞のそれよりも低いが，『平家物語』よりは高くなっていることがわかる．

6. まとめ

今回の作業を通して，日蓮遺文の，文章的，文体的特徴をいえば，次のようになる．

まず，文構造についてみると，単文の占めるウェイトが高く，このことが，日蓮の文を総じて短くしている．ほぼ同時代的な親鸞の文や，平家物語の文などと比較して，日蓮の文が短いのは，そのためである．単文仕立ての構造は，情意性ではなく，論理性を表現するのに適している．自信をもって，論理を強調するタイプの人がとる構文である．日蓮は，自説に，相当の自信をもって，ズバリとものをいうタイプの人であったと思われる．あれこれ条件をつけて，クドクドと説明するのではなく，断定的に，力強く論理展開していく，そういうタイプの文章家であったといってよい．

次に，主辞の現われ方をみれば，日蓮は，主語を比較的大事にしているといえる．主語の省略された文脈依存型の文が，比較的少ないのである．これが，日蓮の文をよく整えている要因になっている．これは，日蓮が，文章でもって説得することに力を注いだためと思われる．言語の厳格さを十分に認識していたからこそなのである．

次に，品詞の現われ方についてであるが，日蓮遺文の特徴として，名詞比率の高さを指摘することができる．この現象は，用言のみとの比較においても，また，同様である．片岡 了のデー

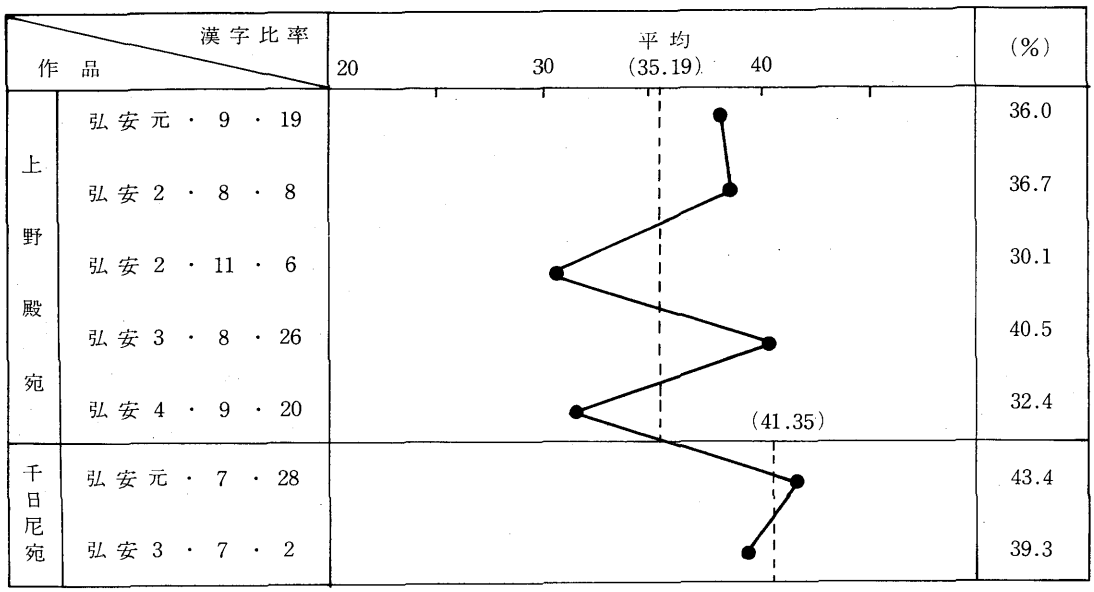

図1.　同一人宛消息の漢字使用率

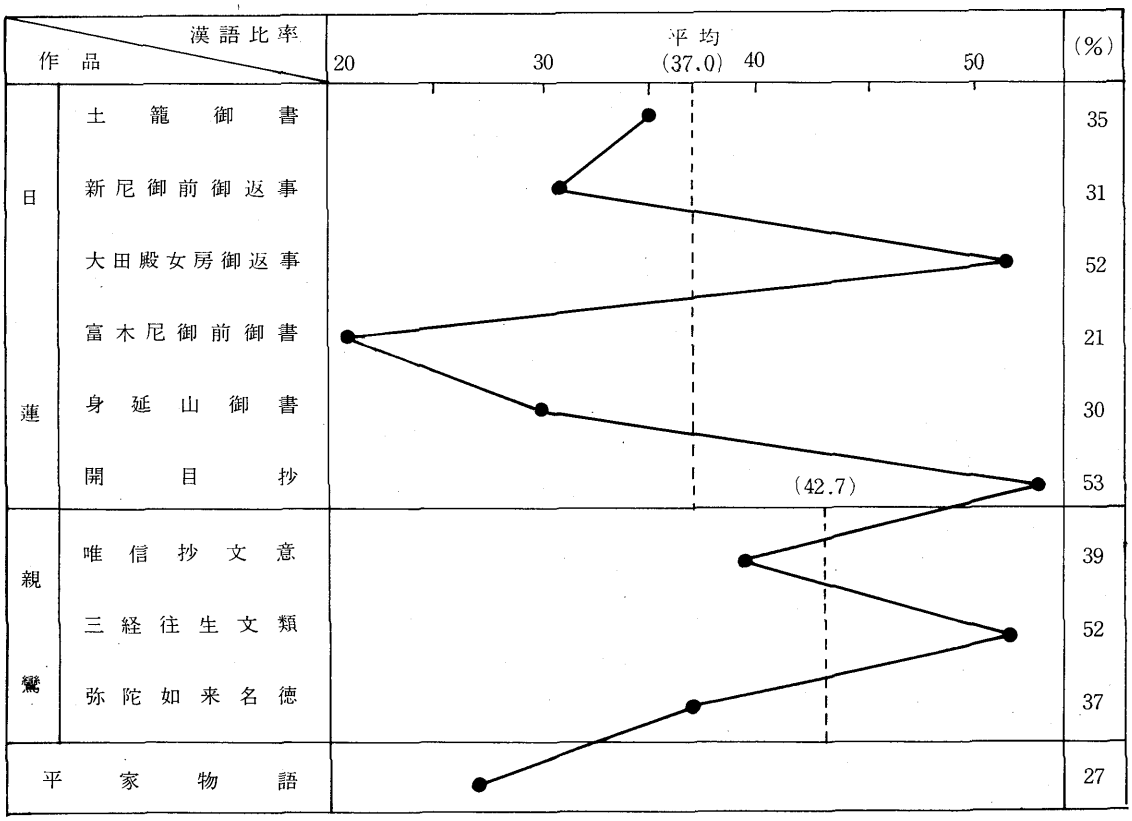

図2.　日蓮・親鸞・平家物語の漢語比率

タによる親鸞の文章との比較によっても，日蓮遺文の名詞比率の高さは証明された．日蓮遺文が，名詞型の文体であることを否定するわけにはいかない．体言型の文章は，文章心理学的にいえば，心的・内的方向性をもつことになる．ユングの内向型に該当するタイプといえる．

次に，漢語（漢字）の使用についてみてみよう．漢語（漢字）比率は，文長を決定する絶対的要件ではないまでも，この両者には，相関が認められる．すなわち，漢語（漢字）比率の高い文章は，大概，短文構成になっている．また，漢字（漢語）使用の多寡は，文章文体の難易度とも相関があり，そのことが，文章の受け手を意識した表現傾向によって伺える．従って，日蓮による漢字と，かなの使い分けは，受け手の個性差を意識してのものであったといってよい．この場合，個性差とは，日蓮の認識による相手の教養度ということになる．

日蓮遺文における漢語（漢字）使用の多寡は，いうまでもなく，他の作品との対比において，はじめて明らかになる．図2によって，親鸞の文章との比較でみれば，漢語比率平均は，日蓮で222÷6＝37.0（％），親鸞で，128÷3＝42.7（％）となり，むしろ親鸞のほうが高くなる．ところが，『平家物語』との対比でみれば，漢語（字音語）の比率は，37：27（％）となり，日蓮のほうが，断然高い数値を示しているのである．

ニーチェの『悲劇の誕生』では，人間が，二つのタイプに分けられている．すなわち，アポロ型とディオニソス型とである．前者は，危険も顧みず，荒海の中を小舟で漕ぎ進むタイプをいう．己れの信念に自信をもち，強引に自説を主張する人間である．これに対して，後者は，自己を周りにうまく融合させることのできるタイプである．従って，つとめて，摩擦を避けようとする配慮を惜しまない慎重な人間ということになる．スイスの病理学者ユングによれば，性格として，アポロ型は内向型に，ディオニソス型は外向型に相当するという．

また，文章心理学の波多野完治は，品詞の使用頻度から，文章を「体言型」と「用言型」とに類型化する．いうまでもなく，前者は名詞・代名詞の比率が，後者は動詞・形容詞・形容動詞の比率が高い文章のことである．そして，前者は事物（心的）指向タイプであり，後者は社会（外的）指向タイプであるとする．さらに，谷崎潤一郎は，文章家を，和文脈作家と漢文脈作家とに分ける．やわらかい和文体タイプと，堅い漢文体タイプという類別である．

これらが，それぞれ対概念として立てられたものであるとすれば，「アポロ型」は，同時に「内向型」，あるいは「体言型」であり，「漢文脈作家」ということができ，「ディオニソス型」は，「外向型」であるとともに，「用言型」でもあり，「漢文脈作家」であるといえる．

これまでの情報は，日蓮が，まさしく，前者であることを示している．日蓮は，いかなる障害にもめげず，強い信念をもってつき進む「アポロ型」人間であった．そして，性格的には，「外向型」というよりは，むしろ「内向型」であった．このことが，すでに述べたように，消息などの受け手への配慮となって現われたものと思われる．従って，社会指向タイプではなく，事物（心的・内的なもの）への方向に向かうタイプの人であったということができる．さらには，文章家としてみれば，やわらかい文章を書く和文脈作家ではなく，堅い文体を得意とする「漢文脈作家」であったということになる．

以上，日蓮遺文の文章・文体について，計量的なアプローチを試みた．ここでは，文の構造，主辞のあり方，および品詞比率，漢語（漢字）比率といった，文体的特徴をアナリーゼ項目とした．

本稿で扱っている『太田殿女房御返事』と『大田殿女房御返事』とはそれぞれ異なった作品である．前者は1277年に，後者は1280年に成っている．

注

1) 日蓮遺文は，国語史上，きわめて重要な文献資料である．変遷がはげしかった中世の国語資料としては，質・量ともに最高であり最大である．通時的な見方をすれば，国語史上の空白を埋める上でかけがえのない資料ということになる．
ここでは，作業の難易度と結果の有効性を考慮して四つの項目を採用した．これらの項目は，文体論や文章心理学のほうでも常套的に扱われてきている．

2) 人間の性格分類に，ギリシヤ神話などの神々を当てることがある．本稿のまとめのところでも述べるようにニーチェも『悲劇の誕生』で，人間をアポロ型とディオニソス型とに分けている．前者は強引につき進むタイプであり，後者は順応性のあるタイプである．

3) 片岡 了 「日蓮上人の文体 ― 開目抄と消息から ―」(「仏教文学研究第6集」，仏教文学研究会 編)，244-245，1968年6月．

4) 日蓮の文は『昭和定本日蓮聖人遺文第2巻』から，親鸞のそれは『岩波日本古典文学大系82，親鸞集・日蓮集』から採った．

5) これらの検定の仕方については，筆者による「日蓮遺文の文長 ― 計量分析を通して ―」(「愛知教育大学 研究報告 第35輯)，165-168，1986年2月を参照のこと．

6) この判断のベースになっているのは，前掲書[注3] p. 247の次のような記述である．
「こうみて来ると，日蓮の文の比較的短い理由の一つとして，文の構造の簡単なものが多いということがあげられるようである．つまり構造の簡単な文をたたみかけるようにつみ重ねて行くと見ることができる．いいかえれば，一つの判断にいくつかの条件をつけて，ためらいながら進むというのではなく，ことがらをすぱっと割り切ってつき進んでいくタイプと考えられる．」

7) ここの判断は，前掲書[注3] p. 248の次のような記述が前提になっている．
「主語のはっきり現われない文が多いということは，それだけ，文脈や場面への依存度が高いということであり，逆の場合は，一つ一つ念入りにおさえて表現を組み立てて行くタイプであると考えることができよう．」

On the Style of Nichiren's Posthumous Writings
—— Through the Measuring Analysis ——

Jun'ichi Kose
(Faculty of Education, Gunma University)

According to the four items, we analyzed quantitatively the stylistic features of Nichiren's posthumous writings:

(1) Sentence structure.
(2) Occurrence of the subject.
(3) Occurrence of the parts of speech.
(4) Percentage of the use of Chinese characters.

Thus we obtained the corresponding results:

(1) Simple sentences from the high percentage.
(2) Relative weight is given to the subject.
(3) Nouns show the higher percentage.
(4) Chinese characters show the high percentage.

From these it becomes clear that Nichiren is Apollonian, introversive and substantive. He is an author who likes the context of Chinese writings.